

## フランス・キリスト教思想の植村正久への影響

森 川 甫

「植村正久先生は無類の読書家であった」<sup>(1)</sup>「植村正久君について感心したことの一つに、君はどんな騒がしい処でも、平氣の平左で書見したことである」<sup>(2)</sup>と、内田魯庵や杉山高吉や、その他多くの人々が植村正久の読書について証言している。実際、植村の著作をひもとく時、おびたゞしい人名の引用、多くの思想の紹介に驚かされる。東西のおびたゞしい書物を「人数倍読書博渉」<sup>(3)</sup>して、植村の人と思想が形成されたのであろう。

植村正久に与えた影響としては、元来、イギリスの文学と思想の影響が定説となっている。植村自身もこのことを晩年述懐している。「私は英語を読むようになったことを感謝して居る。これは自分のしたことではない。神の摂理と母親の親切とに由ることである。……ドイツの学問をすると妙にドイツ鼠眞になる。フランスの学問をすれば大井憲太郎や中江篤介のような人が出来る。読書はその人と大いなる関係がある。これらのことを考えると自分が英語を学んだこと、これを読むように導かれたことを感謝せざるをえない」<sup>(4)</sup>

このように、「英学」の影響はもちろん、否定できない事実であろうが、フランス思想の影響もかなり認められるように思われる。<sup>(5)</sup>彼の著作には多くのフランス人思想家の名前が見えるが、その人物なり、思想を紹介したり、或いは頻繁に引用されているのは、フランス的思想の伝統を受け継いでいるスイス人も含めてアレクザンドル・ヴィネー、<sup>(6)</sup> プレーズ・パスカル、<sup>(7)</sup> エルネスト・ルナン、<sup>(8)</sup> ジャン・カルヴァン<sup>(9)</sup> であるが、本論ではカルヴァンを除いた三人について調べてゆきたい。

カルヴァンに関しては、『福音新報』（第二百五号、明治二十八年）掲載の『改革時代の神学者カルヴァン』と題する一文の中で、「十六世紀歐洲宗教界の風雲は、とみに一変して、雷閃き、雷鳴り、腐敗朽陳の天主教は、倏忽の間に柱折れ、屋破れ、遂に支うべからざるに至りけり。宗教革

命の鐘鼓は山より山に鳴り渡り、国より国に馳せ伝わりて、見るが中に火の手は、ますます衝天の勢となりぬ。……しこうして天また一つの寧馨児をフランスに与えぬ、カルヴァンすなわちその人なり」<sup>(10)</sup>とカルヴァンを紹介し、その事業と感化力の大きなることを指摘している。「蓋し彼が弁舌はルターに一步ゆずりしといえども、その智力学識は彼を凌駕せりというべし。ゆえにその勢力はよく歐洲西部の各国に波及せり。またルターに優り、しこうしてフランスにて改革の領袖となりそれがために努力せし者は、多く彼の門下生なりき。」<sup>(11)</sup>と述べ、「カルヴァンは実に改革時代光輝ある燈明台なりき。」<sup>(12)</sup>と称讃している。また『宗教改革四百年の記念に就きて』（『福音新報』第一千一百六十五号、大正六年）の中では、「日本はルターのごとき信仰によりて救われるの外なきを覚悟すべきである。しかしルターの改革にも短所はある。カルヴァンも必要である。他日そこを研究したい。」<sup>(13)</sup>と述べているごとく、カルヴァン研究の意図がうかゞえるが、熊野義孝博士も指摘されているように、「残念ながらその後もカルヴァンの纏った研究や解説を植村に求めることは困難である。」<sup>(14)</sup>「それにもかかわらず、植村の教會的神学的全活動がこの方向に推進されたことを証明する事實は、決して乏しくないのである。」<sup>(15)</sup>が、カルヴァンの神学はスコットランド神学を通じて間接的に説かれた<sup>(16)</sup>と考えられるので、本論では、カルヴァンの植村正久への影響は取扱わず、後日、問題としたい。

## (一) ヴィネー、パスカル

明治22年4月の『国民之友』に植村自身の述べたヴィネーに関する言葉がある。「西洋の文学に至りては未だ其玄妙の味を学び得ねど先ず仏人ヴィネー氏の宗教及文学の議論は余が今日迄の進路を支配したるものなり。」<sup>(17)</sup>また、『福音新報・

明治38年8月』では、「余は瑞西人ヴィネーの著述に由りて、非常に大なる利益を得たるもの一人なり。」<sup>(18)</sup>と述べて、ヴィネーから影響を大いに受けていることを云い表わしている。ヴィネーはスイス改革派教会の神学者で、ローザンヌ大学教授として実践神学とフランス文学の講座を担当し、*Discours sur quelques sujets religieux, Etudes sur Pascal, Etudes sur la littérature française au XIX siècle* 等の著作をなしている。

植村は、「これらの書物がどの位、私を訓練したか解らぬ。そういう縁故から、Pascal や Vinet を日本の読書界にしばしば紹介した。」<sup>(19)</sup>と云っているし、小崎弘道は『真理一斑』の出版に際して、植村が、この書の構想を練っていたころ、特にヴィネーに親しんでいたことを証言している。「その頃、君が専ら熟読しておられたのはスイスの神学者、アレクザンドル・ロドルフ・ヴィネーの著作であった。私は彼の著書の一なる『キリスト教哲学』を君より借りて読んだことを記憶している。私は君が『真理一斑』の著作にヴィネーの著書より相当暗示を得られたことを疑わない。」<sup>(20)</sup>

『真理一斑』を執筆するにさいして、植村はパスカルの思想をヴィネーを通して教えられたのであろう。田辺保氏はヴィネーの画いたパスカル像を次のように述べておられる。「要するにこのスイス人のえがいたパスカルの姿もまた、主観的・個人的な体験の中でとらえられたものであった。19世紀初頭、ロマン派の詩人シャトーブリヤンのえがいたパスカルが、主観的パスカル像の最初のスケッチであったとするならば、その世紀の後半ヴィネーがこれをはっきり意識にのせ、『パスカルは著作家ではなく、人間である』という宣言を放った。」<sup>(21)</sup>「ヴィネーの時代にいたってはじめて、『パンセ』が個人の表出をつつしんだ古典期の作品でありながら、その中に溢れている作者の《moi》に目をつけることができるようになったと云えよう。ヴィネーは、『パンセ』の中に出来あいの思想でなく、むしろパスカルの『思考の内的な作業』を、いうならば『精神の醗酵』を見てとっている。」<sup>(22)</sup>「いわば、ヴィネーのパスカル理解はきわめて内面的であり、自分の心と思考と

によって一つの高い経験にたどりついたという見かたは、たしかに典型的なプロテスタント、あるいは敬虔主義的(piétiste)な考えかたに立っていると云いうる。」<sup>(23)</sup>「『心情の宗教』としてのキリスト教の価値をみとめ、自らもまた、みずみずしい感情の溢れた文章を綴った人が、ヴィネーの流れにもっとも多く負っていることは、重ねて断言しておいてもよいかと思う。」<sup>(24)</sup>実際、『真理一斑』には、内面的、敬虔主義的なヴィネーの伝えるパスカルの思想を数多く見出すことができるであろう。また、この書に用いられているパスカルの思想は『真理一斑』の中心的思想を支える極めて重要な役目を果している。

「フランスのパスカル曰く、吾人は自己の状況を細かに思察するときは、天地の間わが心を慰め得べきもの有らぬほど果敢なきものなり。世の帝王には多くの臣妾かたわらに侍し、百方力を尽くして自己の身上を顧みるに遑ならしむるがゆえに、辛うじてその心に安易なるを覚ゆるなりと。思うに世人の自己におけるや、時として帝王の有様と同じ。余は目を閉じ、危きを覚えずして薄氷を踏まんよりむしろ目を開き、危きを見、しこうしてこれを救うの堅固なる地を求めんと欲するなり。」<sup>(25)</sup>「これを要するに、吾人は限界に制せられ、甚だ不完全にして独立することを得ざるものなり。西哲のいわゆる万有中の最も脆弱なるものなり。吾人はこれによりて、生命の短縮なること及び識見の狭隘なるを悟る。しかれども、わが靈性の妙なるここに一個の意想を生起するときは、必ずしもこれが対偶を思い起こさざるを得ず。吾人は己れが力の限りあるを知るときは必ずその対偶なる無限の存在者あることを知る。吾人の脆弱短命なるを知るときは、全能なる永住者を想わざること能わず。」<sup>(26)</sup>パスカルの時代には、神の存在を否定する多くの自由思想家がいた。パスカルは彼らを神に立ち帰えらせるため、まず、自己とは何かと問い、その存在の不確実で、不安に満ちたものであり、人間が脆弱で、有限の存在であることを指摘し、ついで、全能にして無限の存在者がおられることに思いを向けさせようとしている。植村正久が『真理一斑』を書いた時代は、進化論、唯物論が紹介されて、無神論が主張される風潮が強かった。これに対して、植村は、キリス

ト教こそ絶対の真理であることを主張しようとして、この著書を執筆したのである。こういう『キリスト教弁証論』の性質をもつ『真理一斑』の中心的部分にパスカルの思想が導入されていることは極めて重要な意義のあることと云わねばならない。高山正顕博士は上記の断章の引用に関して、「我々はここに、有限を認める以上無限を認めねばならず、自然的なるものを認める以上超自然的なるものを認めねばならずとする形而上学が我国に始めてその独自の論理をもって紹介され、主張されているのを見るであろう。これは当時の実証主義・進化論の流行時にあって、実に驚ろくべきことと云わねばならない。」<sup>(27)</sup>と高く評価されている。

山路愛山は『太陽』（明治四十三年十二月号の『我が見たる耶蘇教会の諸先生』と題する一文の中で、「されど謙堂と云ふ氏の文名は都下を押し氏の書きたる『真理一斑』は青年の愛好したる善き書物にして我等などは其の書を手にしたる時、天来の気ありて我身を襲ひしが如く感じ、一夜読み通して遂に寝ぬること能はざりき。」<sup>(28)</sup>と書いているが、パスカルの思想がその中心部分に導入されている植村正久の『真理一斑』が、当時の青年たちに、大きな感動を呼びおこしている事実はこの時代、またそれに続く時代の人々の精神形成にパスカルが多少とも寄与していることとして注目されねばならぬであろう。

## (二) ルナン

ルナンの名前は植村正久の著作の中に頻繁に引用されている。とりわけ、キリスト論関係に多い。例えば、『真理一斑』の『イエス・キリストを論ず』<sup>(28)</sup>、また、『キリストノ復活ヲ論ズ』<sup>(28)</sup>、『現今のキリスト教並びに将来のキリスト教』<sup>(28)</sup>、『イエス・キリスト』<sup>(28)</sup>、『キリストとその事業』などである。これは、当時、世界各国で翻訳、出版されていた、ルナン著、『キリスト教起原史』の第一巻『イエスの生涯』<sup>(29)</sup>を直接あるいは間接に読んでいるからであろう。

ルナンはパリに出て、サン・ニコラ・デュ・シャルドネ、イシ、サン・シュルピスと次々に三つの神学校に学んだが、やがて聖職者の身分に失望

を感じるようになった。1848年の哲学教授選抜試験に首席で合格し、博士号を得、学士院会員、コレージュ・ド・フランスのセム語担当教授となった。一ヶ月余り、姉、アンリエットとパレスチナ地方を旅行し、イエスが30年余の生涯を送った、ナザレ、ガリラヤ湖畔地方やエルサレムの風物に親しんだ後、カジール山中で、姉と「たった二人きりで、この書物」<sup>(30)</sup>『イエスの生涯』を書いたのであった。『イエスの生涯』の核心は比類なきイエスの優れた人格に対する信仰である。「未来の不意の現象がどんなものであろうと、イエスは、凌駕せられまい。彼の宗教は、絶えず若返るであろうし、彼の伝記は、限りない涙を誘うであろうし、彼の苦悩は、最良の心を感動させるであろう、すべての時代は、人の子のうちイエスほど大いなる者の生れなかったことを、言明してゆくであろう。」<sup>(31)</sup>

さて、ルナンの『イエスの生涯』はどのようにして植村の手に入ったであろうか。明治5年に日本基督教会が創立されたが、「小川義綏手記の『公会日誌』によれば、二月二日の条に、『即安息日朝九時集会祈禱バラン師出席十一字散衆屋後三字集会祈禱バラン師馬太伝講義畢り受洗ノ者九人アリ長老ノ撰アリ小川當撰ナリ則チブラオン師バラン師手ヲ按テ権ヲ授ク』<sup>(32)</sup>植村正久はこの日のおもい出を次の如く記している。『この日受洗した者は、その篠崎と竹尾録郎、安藤劉太郎、進村漸、押川方義、吉田信好、佐藤一雄、戸波捨郎、大坪正之助の九名で、…(中略)……。安藤劉太郎は本願寺の僧侶で寺から横浜に留学を命ぜられ、傍ら基督教の探偵をも勤めて居たのかも知れない。洗礼を受けた年の九月十三日に本願寺の法主や島地黙雷等に随行して外国に出かけた。彼等と共に即ち外国基督教の模様を視察し、基督教反対の書籍を夥しく持ち帰ったやうである。其の中にルナンの基督伝もあった』<sup>(33)</sup>『安藤は斯くの如き人物であったが、それでも帰朝後は僧侶として立たなかった。其理由はわからぬが何となく心疚しく感じたものであるまいか。兎も角彼は其の後関信三と改名し、文部省設立の東京師範学校附属幼稚園の主任者として勤務した』<sup>(34)</sup>また、九名の受洗者のうちの一人、吉田信妙氏は横浜海岸教会の長老となり、下谷教会の創立

された時は、新任牧師、植村正久を助ける目的でその会員となり、長老に選ばれた。<sup>(35)</sup> こうした関係から、植村正久はルナンの『イエスの生涯』を知り、あるいはまた利用できたかも知れない。

前に述べた、『イエスの生涯』を持ち帰った、島地黙雷は植村正久と如何なる関係にあるだろうか。

明治5年正月26日、黙雷は他の4人と共に横浜を出発し、欧米諸国を巡視した。黙雷はヨーロッパの聖書に対する高等批評を讚美しており、また十字架の力の偉大なことに今更の如く驚異していたようである。<sup>(36)</sup> ヨーロッパからエルサレムを巡歴し、さらに印度に入って仏跡を訪ね、明治6年帰朝した。<sup>(37)</sup> 帰国後、『報四叢談』を発刊しキリスト教を非難した。特に、ルナンの説を用いて、キリスト復活論を攻撃した。<sup>(38)</sup> 植村正久はルナンの『イエスの生涯』を島地黙雷が持ち帰ったことを述べた後、次の如く云っている。「其の一節が復活新話と題し、島地縮堂の名を以て報四叢談と云う雑誌に掲載せられたことがある。基督は実に復活して居らぬ。マグダラのマリヤの血迷ひから出た話に過ぎぬと断定して、基督教に一撃を加へんとしたのである。」<sup>(39)</sup>

植村正久は、島地黙雷を仏教徒の中での、キリスト教排撃の強力な論客とみなしている。<sup>(40)</sup> 植村の講演のメモを見ると、黙雷に関する事項がかなり見受けられる。<sup>(41)</sup> 明治34年10月、仙台教役者会での講演『日本の基督教の回顧及び将来』では「仏教の狼狽、彼ら間諜を放つ、彼らの洋行、報四叢談」、開教五十年記念講演『五十年間に於ける基督教の戦闘的思想』では、「報四叢談、島地黙雷、復活新話、フリーシンキング社のものの翻訳、ルナン耶蘇伝(復活否認説)、セルフイントロダクション・バイブル」、大正13年、靈南坂教会での講演、『日本に於ける基督教の過去・現在・将来』では、「本願寺と基督教、法主の洋行、両約全書自語相違、耶蘇教排撃論、奇跡に対する反感」などの事項が見られるから、植村正久は島地黙雷を重要な論敵と考え、反駁を加えているのである。

島地縮堂の復活新話は『報四叢談』の第七号(明治八年)以下に掲載されている。<sup>(42)</sup> 彼が復活新話を書いた目的は、復活の問題をとらえてキ

リスト教に一撃を加えることであつた。「耶蘇宗徒の説には種々奇怪なる事多きが中に其最も奇怪とすべきは古往今来一切の死人が世界の末日に復活して昇天墮獄の審判を受くると云説なり然るに此人民復活の怪説は実に彼宗第一不動の基礎とする耶蘇復活の奇談より生じて彼宗今日の盛大を致すも其繇て起る本を推せば全く此奇談に根基すれば今先づ耶蘇復活の談より説て而後人民復活の説に及ばん。」<sup>(43)</sup> 彼はまず、イエスの復活は、事実と道理とを比較考証すると、妄想から生じたものであると断定し、次に、人間の復活は新約聖書に書かれているが、未来を妄想した空説であつて信じることができないという。<sup>(44)</sup> そして、結論として次の如くいう。「凡そ此両復活の怪談は実に耶蘇宗門の骨目腑肝にして之を除けば別に耶蘇宗なる者あることなし然るに世の教を論ずる識者先生にして教は真理に近きを択ぶと云ひつゝ却て此教を以て第一とすと云者知らず之を以て真理に近き者とするか予に於ては解し得ざるなり況や我人民の愚盲なる今日の如くにしてしかして之に加ふるに此怪説を信用せしめんことを欲す予復た其何の意なると知らざるなり」<sup>(45)</sup>

イエスの復活に関して、島地黙雷の主張は次の如くである。「彼耶蘇は已に刑架の上に死せしかば其門徒等は愛師を失ひ慟哭悲痛して落胆し猶太の祭司長老等は先づ禍根を断ちたりと安心せしに誰れか思はん一人の狂女抹太羅の馬利亜が不圖した熱信の妄想よりそれ復活と叫びし一言全地球を轟かして早く耶蘇宗門の大基礎となり幾千萬人の脳髓を攪動せしは最も不可思議の奇数にして耶蘇は固り求めざるの余栄馬利亜も亦期せざるの功名なるべし。」<sup>(46)</sup> 「偕耶路撒冷に残りし門徒等は多少の悲憤と信愛との涙に辛く安息日を送り翌日曜の朝になれば今日こそせめての思い出に送事なりとも念頃にせんとまだ明けやらぬ朝まだきに最も信愛深き抹太羅の馬利亜が仮審の傍に行て見れば蓋石は早や取り除きありし故こは不審なることゝ思ひながら審中を見れば屍骸はなく体を裹みし帛布などが其所此所に残り居るのみこは何事ぞと顛倒狼狽多少の妄想を生ぜしが此時復活の光りちらりと精神の上を過ぎれり如何にも熱信狹隘の婦人の情にては隣れ愛師の葬埋なりともと思ひ詰めたる甲斐もなければ責めては声か影なりともと

慕ふ心の我と我が作り出だせし心の形ち我は己に復活せりと告げしが如く覚へんは屍骸は早く加利々の兄弟が持帰りしとは神のならぬ身気付きなければ屍骸なきより斯る妄想の夢を見しも己れが愛の深きより自ら作りし復活なり、あゝ馬利亜々々汝は婦中の大丈夫なり汝が熱信の妄想より不朽の事業を言ひ固めしは世界稀有の名誉なり耶蘇宗第一の功業なり」<sup>(47)</sup>

島地黙雷のこの主張に対して、植村正久は『六合雑誌』（第七十号、明治十九年十月）で、「或ル人曰ク、イエスノ復活ハソノ身ノ復活ニアラズ。コハ門徒ノ心ニ思ヒ浮カミタル妄念ノミ。カネテキリストヲ愛スルコト切ナリシカバ、時ニソノ面影ノ見ユルガゴトキ心地セラレタルナラン。中ニモマグダラノマリヤ女ハ愛慕ノ念切ニシテ止ミ難ク、……（中略）……カクノゴトク一婦人ノ妄想他ニ波及シ、復活ノ説次第ニ広ガレリ。一犬虚ニ吠エテ万丈実ヲ伝ウトハ、コレラノ事ヲ言ウナラン」<sup>(48)</sup>と島地黙雷の主張を引用して、「日本ニテハ彼ノ島地黙雷トカ言エル和尚ガ自ラ著述セルガゴトクニ言イナセド、ソノ実ハ」ルナンの説の「剽窃杜撰ナル訳文ニシテ、復活新話ト呼バルル文学上ノ一奇跡ニアラズヤ。」<sup>(49)</sup>と批評している。島地の紹介したルナン復活の説に対して、植村正久は「イエスノ門徒ハイズレモ智恵勝レタル人物ニテ世ノイワユル俊傑ニ相違無シ。シカルニ一婦人ノ語ル所ヲ聞キテ、ソノ実否ヲ糺サズ、数名同時ニソノ妄想ヲ受ケ継ギタリ、コノ痴呆漢ノ集合ニアラズシテ何ゾヤ。余輩ハイエスノ門徒ハ皆達徳ノ君子ナルヲ知ル。モシマリヤガ言ウトコロノ実否ヲ疑イツツモ奇貨失ウベカラバコレ詐偽ヲ主トスル奸人ノ集合ニアラズシテ何ゾヤ。マタコニ怪シムベキハキリストノ死体イズレノ所ヘカ失セタル。ナオ政府当路者ノ手、モシクハ祭司長ラノ許ニ在リトセバコレモモッテマリヤノ妄想ヲ破リ、世人ノ夢ヲ攪セコト易々タルノミ。イエスノ門徒ガコレヲ盗ミ、マタイカニシテ政府ノ咎ヲ免レ得タリヤ。マタイカニシテコノ跡方モ無キ妄想ニヨリテ、ワガ13人ノ心ニ熱心ナル信仰ヲ起コシ得タルカ。カクノゴトキハ道德上コレアラントハ思イモ寄ラザルトコロナリ。」<sup>(50)</sup>と反論している。

植村は上述の箇所以外でも、イエスの復活はマ

グダラのマリヤの妄想より生れたとのルナンの説を紹介して、このようなルナンの説は無神論から出たもので、超自然的事実に対して偏見をもち、また、ルナン自身が作り出した架空の事実によって、歴史的事実であるイエスの復活を否定しようとするものであると批判する。すなわち、「キリストノ言行ニ関スル、ルナン氏ノ迷謬ハソノ無神論ヨリ渊源シ来タレリ。」<sup>(51)</sup>「今日に至るまで反対論者の福音伝を攻撃するを見るに、超自然の事は一切これを信ずるに足らず。奇蹟は到底有り得まじきことなり。ゆえにこれを事実のごとく記載するの書は信ずるに足らず。これを記載するに至れるものは現に奇蹟を行ないたることあるがためにあらず。ここは他の理由をもって説明せざるを得ずと。彼らは超自然の事実に対し、この偏見を抱きつつ、福音伝を論ぜんとす。宜なるかな、その説謬に陥れるや。シュトラウス、バウル、ルナンは福音伝の批評家中最も錚々たる者なり。この三人の説謬に陥りたる根柢はすなわちこの点に在りと見えたり。……ルナン曰く、奇蹟は有るべからざることなり。ゆえにその伝説は信ずべからざるなりと。」<sup>(52)</sup>

「ルナン、シュトラウスの徒、批評の説を逞しゅうし、自己の考えに基づきて、キリストの伝を作らんと試みたり。しかれども、その結果は架空の臆測により、想像の雲霧に彷徨して、小説的の著述を作すに終わり、蓋し福音伝のほかキリストの歴史を伝えて、信ずるに足るものなし。ルナン、シュトラウスの徒といえども、新たなる史料を発見したるにあらず。ゆえに彼らは福音書の記事信じ難く、小説を去ること遠きにあらずと論じたるにもかかわらず、その自ら著述せるキリスト伝は、彼らの頭脳より編製せし擲るところなき小説たるを免れず。」<sup>(53)</sup>

上述の如く、植村正久はルナンの説を真向うから反対しているが、ルナンの説を紹介している表現に関しては、ルナンを用いている手法に似て文学的である。元来、ルナン『イエスの生涯』は人物、風景の描写が生き生きした文学的表現がなされているが、イエスの復活に関する記事を植村が紹介しているところは、ルナン以上に詳細な描写がなされている。まず、ルナンの文章を、次に、植村の文章を、詳細な描写には下線を施して引用

しよう。

植村が紹介してルナンの説をルナン自身の著作から引用すると、「日曜日の朝、マグダラのマリアを始め、女たちは、大そう夙く墓へやって来た。石は入口から除けられ、遺骸はもう、置かれた場所に無かった。同時に、世にも不思議な噂は、キリスト教徒のむれに拡がったのである。『主は甦れり！』の叫びは、電光のやうに弟子たちのあいだを走った。その叫びは、愛情のゆえ、に苦もなく信じられた。何事が起ったのであろう。……（中略）……そのをり、マグダラのマリアの強い想像力が、主役を演じた、と。愛の崇高な能力！幻想におそはれた女の愛情が、復活した神を世界に与へるその聖い瞬間！」<sup>(54)</sup>

この箇所を、植村は『キリストとその事業』において次の如く表現している。「ルナン曰く、極めて神経質なるマグダラのマリヤ、イエスの死を哀しみ、これを慕うこと甚だ切なりしかば、その墓に詣でて、悲嘆遣る方なかりしにあたり、風の音をも主の声と聴き、毛髪そよと動くにも、イエス来れりと感じたり。彼は死せしキリストの幻影を心頭に浮べたり。キリストはマリアの愛によりて復活らされたり。かって七鬼に悩まされし狂婦はイエス復活れりちよう信念を産み出せり。マリヤの揚言にペテロ、ヨハネらも心を動かされて、疑心ついて信心に変じ、その会合せる室の窓に物の音聴こゆれば、すはこそキリストの出現せられたれと、色めき立つほどもなく、世に在りしイエスの幻影は正しく立ち現われにけりと。イエスの屍は墓のうちに冷やかなり。マリヤの愛の独り温かにして、自余の弟子を鼓舞し、朦朧たる幻影疑いもなき事実となりて、キリスト教の歴史ここにその大いなる端緒を開きぬ。あに奇怪の極みにあらずや。何の神話かこれより甚だしきものあらん。ルナン想像に任せて一篇の小説を編み出せしなり。かくのごとくなれば厳肅なるキリスト教の歴史は一大滑稽なりと云わざるべからず。」<sup>(55)</sup>

こうした植村の文学的表現はルナンに負うているところがあると云えるかも知れない。植村は神学的にはルナンに真向うから反対しているが、「文学上はやや価値ある小説を作りて止みぬ」<sup>(56)</sup>と多少評価を与えているのは、福音の地とイエスの人格についての、ルナンの美しい描写を認めて

いるからであろう。また、イエス像についても、熊野義孝氏が「19世紀的な『イエスの人格性とその感化』が目立ち、贖罪に関する解説はごく手薄」<sup>(57)</sup>と評しておられるように、「キリストの人物を超越する由來」、その人間的徳の完全さを弁証するにすぎない一面があるのは、ルナンの影響があるのかも知れない。

× × × × ×

パスカルの思想はヴィネーのロマン主義的解釈を経て、植村正久に伝えられ、その著書『真理一斑』では内面的自我が表出されている。「新しく目ざめた内面的自我の、最も純粹にして熾烈な誕生の声であった」<sup>(58)</sup>と云われる、明治20年台の北村透谷の評論とも通じる内面的自我の思想が感じられる。ルナンに関しては、植村はルナンの如く、イエスを単なる比類なき人格の持ち主としないで、キリストの神性を強調しており、ルナンの奇蹟否定論に反対する。しかし、ルナンのイエス像の文学的表現法には多少の評価を与えているのではないだろうか。『真理一斑』やイエス・キリストに関する文章の情感豊かさは、ルナンに通じるものを感じさせるであろう。この小論にあげているフランスの宗教家の思想は植村正久の『真理一斑』やイエス・キリストに関する評論の中で、陰に陽に表現され、影響を与えていると云えよう。

- 註(1) 『植村正久と其の時代』(教文館)第五巻、p. 470。  
 (2) 同上、p. 469。  
 (3) (1) 参照。  
 (4) 『其の時代』第三巻、『門前の小僧』p. 512。  
 (5) A.R. ヴィネーの影響については、熊野義孝博士が、『興文』の「名著解題『真理一斑』」(昭和三十五年一月号)で指摘されており、パスカルの『パンセ』の断章を『真理一斑』に用いている思想史的意味については、高坂正顕博士が『明治文化史』で論じられており、パスカルヴィネーの『真理一斑』への影響については、田辺保氏が『パスカル、ヴィネー、植村正久』で論じておられる。  
 (6) Alexandre Rodolphe Vinet (1797—1847)  
 (7) Blaise Pascal (1623—1662)  
 (8) Ernest Renan (1823—1892)  
 (9) Jean Calvin (1509—1564)  
 (10) 『植村正久著作集』5. p. 443.  
 (11) 同上、p.p. 447—448.  
 (12) 同上、p. 449.

- (13) 同上, p. 494.  
 (14) 同上, p. 510.  
 (15) 同上, p. 503.  
 (16) 『其の時代』第五卷, p. 471.  
 (17) 同上, 『ヴィネー』, p. 471.  
 (18) 同上, 第三卷『門前の小僧』, p. 517.  
 (19) 小崎弘道「植村牧師遺著『真理一斑』の出版に際して」(植村全集月報, 第4号, 昭和7年)  
 (20) 田辺保, 『バスカル, ヴィネー, 植村正久』  
 (*Etude française* no. 7.1967) p. 50  
 (21) 同上, p.p. 50—51.  
 (22) 同上, p. 51.  
 (23) 同上, p. 51.  
 (24) 『著作集』4. p. 17.  
 (25) 同上, p. 18.  
 (26) 『明治文化史』(洋々社) 4. p. 184.  
 (27) 『其の時代』5. p. 541.  
 (28) 『著作集』4.  
 (29) *Histoire de l'origine du christianisme*, 1863—83, の第一巻 *La Vie de Jésus* 津田穰訳『イエス伝』(岩波)を参照した。  
 (30) Renan, op. cit. p. I 津田訳, 同上, p. 9.  
 (31) Ibid. p. 475, 同上, p. 375.  
 (32) 『其の時代』第一巻, p. 447.  
 (33) 同上, p. 449.  
 (34) 同上, p. 449.  
 (35) 同上, p. 450.  
 (36) 同上, 第二巻, p. 434.  
 (37) 同上, p. 12.  
 (38) 同上, 第五巻, 『過去三十年宗教上の回顧』, p. 12.  
 (39) 同上, 第一巻, p. 449.  
 (40) 同上, 第五巻, p. 19.  
 (41) 同上, p.p. 52—57.  
 (42) 同上, 第二巻, p.p. 423—433.  
 (43) 同上, p. 423.  
 (44) 同上, p. 429.  
 (45) 同上, p.p. 432—433.  
 (46) 同上, p. 424.  
 (47) 同上, p.p. 425—426.  
 (48) 『著作集』4. p. 204  
 (49) 同上, p. 204.  
 (50) 同上, p. 205.  
 (51) 同上, 『キリストノ復活ヲ論ズ』p. 193.  
 (52) 同上, 『何故に吾人は福音伝を信ずべきや』p.p. 270—271.  
 (53) 同上, 『イエス・キリスト』p.p. 320—321.  
 (54) Renan, op. cit. p.p. 448—450, 津田訳, p.p. 354—355.  
 (55) 『著作集』4. p.p. 434—435.  
 (56) 同上, p. 321.  
 (57) 熊野義孝「植村正久『真理一斑』について」(『興文』, 昭和35年1月号)  
 (58) 『明治文化史』7. p.447.